

## 折れた葦にはなるな

「人間は考える葦である」というのは、17世紀の思想家パスカルの、知らない人はいないという位に有名な言葉です。

「パンセ (P a n s e e)」の冒頭では、このように表現されています。「人間は自然のなかでもっとも弱い一茎の葦にすぎない。だが、それは考える葦である。」

ではパスカルは、どうして人間を葦にたとえたのでしょうか。

昨年3月に発生した東日本大震災を目の当たりにして、私たちは、自然の力の前に人間の無力さを思い知らされました。そういう意味では、ひよろひよろとして、誠に頼りなげな葦を、人間の比喩にしたというのも理解できます。

しかし、葦は、ただ弱弱しい、頼りないだけの存在なのでしょうか。

葦は、強い風が吹くと、その風に身を任せしなります。強い風には抵抗できませんが、風が止むとまた元のように起き上がって何事も無かったかのように風にそよいでいます。

葦は、逆境にも折れたりせずに、強かに生きている。まるで、あの東日本大震災で大きな痛手を受けながら、それでもその地に踏み留まり、復興のために槌音を響かせている被災者のことを思い起こさせます。

パスカルが、人間を葦にたとえたのは、人間は確かに自然の大きな力の前には弱い存在ではあるが、葦の様にしたたかでしなやかな復元力を持っている、ということ表現しようとしたのではないかと思います。

しかも、人間には、考える力や知恵がある。ただ、したたかでしなやかな存在ではないということです。

逆に言うと、折角人間に与えられた考える力や知恵を発揮しなければ、地に生える葦に等しいということにもなるでしょう。

勿論、いくらしたたかでしなやかな葦とはいえ、折れてしまうこともあります。しかも、その折れた葦は、近づいた人間を傷つけてしまいかねません。

先日、参議院本会議で、野田総理大臣の問責決議案が可決されました。これで、今国会は事実上機能しなくなり、赤字国債法案や原子力規制委員会の人事、

選挙法の改正など、重要な案件は店晒しとなったままということになるでしょう。国民の負担に直結する消費税の引き上げだけは早々に決着させ、自ら身を削る改革は先送りする。これ程、国民不在の無責任な政治はありません。

今回の一件では、自民党が批判の矢面に立たされていますが、自民党を批判すれば済むという問題ではありません。政権与党である民主党始め既成政党が、党利党略に明け暮れ、保身に身を削って来た結果が今日の事態であり、今の政治は頼むに足らぬと、多くの国民は見ています。

第一次大戦後のパリ講和会議で、イギリスの代表として出席したケインズは、欧州の再興を期すには、ドイツに対して報復的賠償を科してはならず、アメリカからの対独援助も不可欠だと主張したのですが、米国はその案を受け入れませんでした。この時ケインズは、「あなたたちアメリカ人は折れた葦だ」と米国を批判したという逸話が残っています。

ケインズが米国を「折れた葦」と批判したのは、米国が第一次大戦後の平和構築の役に立たないということを強烈に皮肉ったものと思います。

ドイツに対する過大な賠償要求の中には、ドイツから再び戦争を始める力を削ごうという意図がありました。しかし、結果はケインズが懸念したように、ドイツに対する過大な賠償要求が第二次世界大戦への引き金になってしまいました。

旧約聖書「イザヤ書」には、こう記されています。

「見よ、今、お前はエジプトという、あの折れた葦の杖を頼みにしているが、それは、寄りかかる者の手を刺し通すだけだ」

折れた葦は、人を傷つけるのみで、頼みにならない存在だということを示しており、恐らくケインズは、この一説を思い浮かべながら米国を批判したのではないかと思います。

国民は、今日の政治状況に対して厳しい目を向けています。展望が開けず、閉塞感が漂っている日本ですが、それでも国民は、政治に対して諦めてはいないはずです。

私は、政治家の皆さんが、国民にとって「折れた葦」にはならぬよう、切に願っています。（塾頭 吉田 洋一）